



MUSEO PEDRO DE OSMA

ギャラリーのテキスト

(日本語)



シート1

マンネリスム ルーム

概要

この部屋は私たちのコレクションから最古の芸術作品のいくつかを展示しています。

16世紀の間に、ヨーロッパから来られた様々な実践教師が工芸品の訓練を行ない、その中から特に目立ちをしていたのはイタリア人の芸術家たち、彼らは共に芸術的な“マンネリスム”と呼ばれるスタイルを持ち込み、結果イタリアのルネサンス後期にあたるのです。

マンネリスムは特定の理想の美を持たれていて、細長いフィギュア、パステルカラーや気紛れな姿勢が証拠されます。

最初のマンネリスムの画家が1575年に旧副王邸に到達され、ベルナルド・ビットィという者がイエズス会の司祭になられたのです。ビットィはリマのイエズス会、クスコ、アルトペルーの寺院で塗装しヨーロッパの彫刻や絵画といった芸術をインディアンアーティストの手に取り入れようとし絵画や彫刻のはじめの作業場の形成を促進されたのです。

聖母子

ベルナルド・ビットィに起因します、16世紀、キャンバスに油彩

この絵画はベルナルド・ビットィに起因し1595年と1605年の間に描かれました。

聖母マリアのマントとベールをカバーする布の細かい仕上げとテクスチャを達成するマスターの興味深さに気づきます。

マリアの顔はとても制裁で彼女の指は細長く、大きな愛情で子供を保持し載っているように見えます。

赤ちゃんイエスは、優しくマリアの首を愛撫しながら観察者を見て、細かい線で彼の頭の周りにオーラが構成されています。

2人の衣類は鋭い角度で大きく重い布が落ちる形で構成されています。これはビットィの作品の古典的な特徴の一つで、マンネリスム様式の中心を表しています。





シート2

デボーション ルーム

概要

聖母マリアの礼拝は、人気のある宗教の中で最も重要なものの一つです。この偉大な献身が多数のマリアのデボーションの証拠です。

マリアンデボーションはヴァージンを表現する場所、奇跡、彼女の人生の通路や強調されるいくつかの長所により様々に相当します。

マリアンデボーションはヨーロッパからの宗教的な受注により提起され、16世紀にアメリカに到達しました。例えば、ドミニカ人は、聖母・デル・ロサリオを持ち込み。

フランシスコは、インマキュラーダ・コンセプションの聖母を持ち込んだ。

旧副王邸ペルーと他の場所のアメリカでは結果として人々によりメスティーソ宗教が登場したのです。これらのヴァージン公演は、女性の神々の古代の礼拝とカトリックの伝統を組み合わせています。パチャママ、母なる地球のように。

ヴァージン コチャルカス

不明、18世紀、キャンバスに油彩

コパカバーナのカンデラリアの聖母の奇跡は、インドのフランシスコ・ティトユパンキによって刻まれていて、敬虔な先住民が同様の彫刻をコチャルカスまで運ばれるよ頼んだのです。この町の名前を取った新しいデモーションになりました。現在に生かされる巡礼の焦点だったとして、ペルーのアンデス山脈の最も重要なものの一つとなりました。

このタイトルも他の絵と同じように、この傑作は祭壇の上にコチャルカスの聖母の彫刻を示しています。手にバラの花束と日常生活の風景シーンが総称して巡礼を記述しています。風景の中にコチャルカスの悪路やパンパ川が目立ちます。これらの詳細は芸術品を重要な資料にします。また、アンデス共同体と巡礼者の多様な起源の日常シーンが表現されています。「インディアン、黒人、メスティーソ、スペイン人、クレオール」。

ヴァージンの豊かなドレスの装飾品は、金箔でクスコの学校の技術の影響を受けた作品の特徴です。





シート3

大天使 ルーム

概要

この部屋は、大天使の絵画に捧げられています。証拠上の絵は、大天使の二つの異なるタイプを示しています。ヨーロッパのカトリックの伝統大天使とペルーメスティーソ植民地時代アンデスの伝統的な大天使アルカブセーロス。

大天使は天の存在です。いくつかは聖書の中で言及されていて、他は福音書に記載されている。

大天使アルカブセーロスの起源は聖書の大天使から生まれ、これらはペルー太守メスティーソの献身が人気の理由です。元の文化の翼神々をも表す。

したがって、大天使アルカブセーロスは主にクスコで描かれている。若い女性と男性の特徴を活かしてスマートに服を着て、彼らの手にマスカット銃を携帯して表現されています。

大天使アルカブセーロス

不明、18世紀、キャンバスに油彩

大天使アルカブセーロスは細い棒を使って自分の銃に粉体を設置しています。

最初のマスカット銃が情報されたのは、スペインのペドロ・デ・カンディアがトゥンベスに上陸した1528年にさかのぼります。この偉大なライフル銃の音は、アンデスの男によって作成されたツールではなく、むしろ、雷の音に似ていました。そのため地元の人々はこの武器をIllapa、雷の神に関連付けたのです。

このように、大天使のアルカブセーロスの画像は、スペインの兵士、聖書の大天使とアンデス神々の属性を混合させた、ペルー副王領の作成です。

この作品では、この人物の一般的な塗料の特性を見ることができます。通常なんの風景も提示していません。彼女の衣類は広い袖と細かいレース、刺繍やリボンを着ています。帽子は、カラフルな羽で飾られていて、翼は明るい色の詳細を持っています。





シート4

復元 ルーム

概要

美術館での作品の多くは、400年以上の歴史があります。この部屋では、博物館ペドロ・デ・オスマの修復ワークショップで絵画や彫刻の回復プロセス、美術館の芸術品から博物館他の作業場を知ることができます。

絵画や副王領彫刻は、時間の経過に起因して変化を受ける、いくつかのケースでは、我々がその外観を更新する意図で塗りなおした作品を見つけることもあります。他の例では、材料が不足するとキャンバスやボードが再利用され完全に新しい作品が描かれます。

そのため、作品は元の状態を回復することができるプロセスを経ます：塗りを識別するのに役立つX線、塗装表面を除去するための入り江、仕上げにワニスの塗装。

修復キャンバス セニョール・デ・ロス・ミラグロスの壁画

写真は17世紀の後半に、礼拝なセニョール・デ・ロス・ミラグロスを生じさせた壁画を表示し、プロセッシュュナルキャンバスはこれを触発し、18世紀に描きました。どちらも、現在のキリスト教徒の修道院カルメル・ナザレ・マザーズによって守られています。

これらの写真は、キャンバスと壁画の違いを指摘した漸進的なレストアの作業が述べられます。聖母マリアの胸に剣が後から演説で追加されたことを見ることができ、キリストの布の結び目と見られるものは壁に観察されたものとは反対側にあります。また、セニョール・デ・ロス・ミラグロスの背面に聖母の雲の元の色が認識できます。

他の画像では、`キリストの沈着`の回復を説明します。彫刻は、孤独の聖母教会に属しているスペインの彫刻家ペドロ・デ・ノゲラ、によって1620年に作られました。また、`死のアーチャー`をも示し、十八世紀ペルーの芸術家バルタザール・ガビランによって彫刻され現在はサン・アグスティン修道院に位置しています。どちらの作品も、私たちのワークショップで復元された重要な彫刻の遺産なのです。





シート 5

彫刻 ルーム

概要

この部屋はかつてペドロ・デ・オスマの実家のダンスホールでした。シャンデリア、成形品やステンドグラスは、バルンコ市の多くの社会的なイベントにつながった最初のカーニバルパーティーでした。現在、ここでいろいろな彫刻のコレクションを見ることができます。

古代ペルーの彫刻は、儀式のイメージを作成するために役立ちました。私たちのネイティブ文化の彫刻家は木、粘土、金属や石を使用しました。スペイン人の到着とともに、彫刻の伝統はスペインの芸術的影響を受けました。その結果、旧副王邸技術中に作成された彫刻は先住民、スペイン、メスティーソとクレオールが反映されます。

したがって、この部屋の彫刻はマゲイの技術とセビリアの影響を受け彫刻されています。ペルーのアーティストは縁起の良い木彫りの不足への対応としてマゲイが使用がされていました。彼らはすでに知っていた素材を使用し、石膏と糊布で覆いました。彫刻アダムとイブに存在するこの技術は彫刻作品で地域貢献を例示しています。

ラピエダス

不明、18世紀、木彫り

クスコ、キトは、特定の芸術的なスタイルを持つ都市でした。ラピエダスは、キトの学校に属する作品で、18世紀に杉の木で作られました。

ラピエダスは、十字架から降下した後の瞬間を説明するキリスト教のテーマです。無実な母の苦痛と劇的な無実の犠牲のシーンは、宗教美術で頻繁に使用されてきました。

この作品では、ヴァージンは、息子の体を保持し彼の膝の上に傾いて横たわっています。キリストの手首にはコードで縛りつけられた痕が見られる。それらと並んで、体にみられる殴り痕や出血傷は観察者の心の動かそうとする画家の思いを示します。

マリアのマントル内の特定の明るさには、「パンデプラタ」キトの学校の特徴と呼ばれる技術を使用してきました。「パンデプラタ」は、木材を銀板でカバーすることで、その上から青いトーンの釉薬で塗装されます。聖母のオーラは銀色で細部な花や星が含まれています。





シート 6

アレゴリー ルーム

概要

私たちの歴史を通じて、人々の外観は主導的な役割を果たしてきました。古代ペルーの文化は、衣装、彫刻、陶磁器の多くを伝えてきました。植民地時代に、画像の使用は重要な教育資源でした。それによって言語のギャップを狭め、キリスト教の宗教を教えるのに役立ったのです。現時点では、画像はグローバル言語になってマスコミュニケーションを支配しています。

アレゴリーは、アイデアを表す絵です。構成する要素を解釈すれば理解することができると思います。このように、周りの作品の詳細の多くは、慎重な特徴を表現し、観察する為の意味を持ちます。

聖なる十字架の高揚

ラサロ・パルド ラゴスの工房、17世紀、キャンバスに油彩

この絵は、17世紀に作られたと同じ被写体の彫刻で、多くの人のインスピレーションを得ました。

この構図は、人物、物や細部がいっぱい、みんながキリストの犠牲を参照しています。大きな木製の十字架は主な要素で、金箔で作られた光線で取り囲まれている。その中に、釘で打ち付けた痕が出血してるかのように塗装されていることを見ることができます。十字架は、死に勝つ事を意味する頭蓋骨がある小さな丘の上に立ち、同じく地上のパワーと考えられるカトリック教会や貴族をも示す。

この絵では40人以上もの人物があります。その中でも、一番上に三位一体が描かれていて父と息子は同じ外観で塗装されているが、聖霊は白い鳩として塗装されています。下の方では、聖体なペリカンが巣の中にいることを把握できます。ペリカンのイメージは、自身の胸の肉を食いちぎり、自らの体と血を犠牲にして雛を養う信念が思い出されます。

天使たちは、情熱のシンボルである、荊冠、塔内、ハンマーそして釘を保持し。服の鮮やかな色、繊細な手と甘い顔は殉教のテーマに強烈なコントラストを生成します。





シート7

クスコ17世紀 ルーム

概要

クスコ、インカの古代帝国は、ペルー南部の文化的、社会的、宗教的、政治的生活の中心でした。

クスコの絵は、ペルーの太守後半16世紀に来た最初のイタリア人の画家の衝動を受けました。その後、スペインやフランダースの芸術はクスコのアーティストが独自のスタイルを開発するためのモデルを務めました。

この部屋ではディエゴ・キスプ・ティトとバシリオ・サンタ・クルーズ・プマツカラオ、その世紀のクスコの絵画の最高指数の信者の作品があります。彼らの作品は、クスコの学校として知られている18世紀の地域のスタイルの形成に大きく貢献しました。

エジプトのリターン

ディエゴ・キスプ・ティトの周囲、1680、キャンパスに油彩

ヘロデ王は、生まれたばかりのイエスを殺そうと指示していたので、天使は父ヨセフに家族と一緒に逃亡しなければならないと知らせたと聖書に書かれています。このエピソードは、「エジプトからの逃亡」と呼ばれています。

このシーンは、エジプトに戻った時を示します。ヨセフ、イエスとマリアが家に戻った時のことである。彼の優しい歩き方はすべての危険が不在するような、とても穏やかな特別な感覚を放射します。

水平な組成物は、聖家族の周囲の風景を特に重視しています。ペルーの植民地時代の芸術を含めることは、その時期にとっての新たな一面でした。これは、17世紀のアンデスの絵画ディエゴ・キスプ・ティトの特徴であります。エジプトのリターンは、フラメンコ・ペドロ・パブロ・ルーベンス画家の絵に基づいて描かれています。





シート 8

ルーム: クスコ 18 世紀

概要

18世紀のクスコの芸術はペルー副王領が文化的多様な明確な証言です。画家や彫刻家、それらのほとんどは、洗礼を受けたインディアンとメスティーソンでした。彼らはまだ先祖伝来の文化の伝統を受け継がれてました。

顕著な特徴は、金箔技法と呼ばれる二十四カラットの金の薄いシートを利用するクスコ学校の装飾です。

ヨーロッパ文化の金は、これらの地域の経済的な豊かさを表し、地域文化の継承での金は祈りを導入する方法として使われていました。金は太陽神を象徴し、銀は月の女神を象徴する。

芸術クスコの作品の独創性は非常に高く植民地時代に評価されました。ペルーの広大な太守と世界のさまざまなスペインの異なるコロニー地方に大規模な出荷が行われました。

紡績をするヴァージン少女

不明、18世紀、キャンバスに油彩

ヴァージンの幼年期のテーマは、聖書に含まれていなかったテキスト、つまり、いわゆる福音書から来ています。ヴァージンは、伝統的に紡績をするように表されています。紡錘を右手に、コッドを左手。

少女は、花の枠で囲まれていて、マリアのモノグラムで飾らピンで留めたマントを身に着けている。名前のイニシャル取ったデザインが施されています。

ヴァージン少女は黒い髪、宝石やインカ貴族の女性を連想させる服で飾られています。これは、特に18世紀のペルーアンデスに使用されたテーマでした。これは、インカ貴族やアンデスの織物の伝統のシンボルを永続に関心つけようとする動機があったからです。





シート 9

ルーム: 肖像画や家具

概要

ここは、ペドロ・デ・オスマの家の古いダイニングルームです。この部屋には植民地時代と初期の共和党の肖像画や家具が公開されています。当時、多くの他の家具と同様に、これらは東洋にある日本とフィリピンのスタイルを示し、これらはべっ甲コーティングと真珠層の付着物からなる、「エンコチャド」と呼ばれる手法で飾られます。これらの作品は、ペルー副王領に世界中から様々な移民グループの到着から生じる、文化的な影響を反映しています。

見上げれば、博物館のアーキテクチャを特徴づけるこの部屋の装飾多色レリーフ垂鉛板を見ることができます。花と葉のデザインは、ペドロ・デ・オスマの家を介して訪問者のツアーに同行していきます。

ガベテロ

不明、18世紀、彫刻・組立

東洋とムーア人と言われるスペイン南部に定住しているアラブ人の影響を受けて組み合わせている。これは、非常にガベテロでしか証明されていません。十八世紀のこのパーツは、フィリピンから持って来られた材料で作られました。ドン・フェリペ・パルドとアリアガの家でしか収容することができなかったのです。

この大きなキャビネットは3体に分離することができます。はじめの1体には、小さな柱で形成された5つのアーチが観察できる、2体及び3体には引き出しが存在する、印象的な装飾の中で、鍵穴を見ることができます。

この品の装飾は、真珠層とべっ甲の断片にはほぼ全面に花や葉の形によって埋め込まれた作品の中で最も重要な特徴の一つです。





シート11

銀細工 ルーム

概要

この部屋では三つの異なるコレクションがあります。ギジェルモ・ウィセのコインコレクション、ビクトリオ・アザリッティの食器コレクション、ペロド・デ・オスマの宗教物や家庭用物のコレクション。

前ヒスパニックの時代から、金と銀は、太陽と月に関連していました。植民地時代の間に、ペルーの鉱物資源の主な情報源でした。そのため、富は、旅行者からの貴金属の関心を集めました。

現在ではボリビアのポトシには、古代の地域でもっとも豊かなアルトペルーの銀の鉱山が存在していました。非常に活発な経済的ネットワークを生成し、17世紀初頭におけるアメリカで最も人口の多い都市でした。サンタバーバラ、ウアンカベリカもペルー副王領で重要な鉱山でした。銀の取得促進材料、水銀が採掘された場所でした。

ミストレロ

不明、18世紀、フィリグリー

これは、十八世紀ごろの家庭用器具です。ミストレロは、様々な色の香りの花びらを含んでいました。良い香りを与えるためにキャビネット内に置いていました。他にも花びらを家のバルコニーから投げる習慣があったので、宗教の行進中でも見せびらかされていたのです。

ミストレロを飾る花は非常に特定の技術を示しています。銀細線は、異なるサイズの螺旋にねじ込まれています。この技術は、フィルグラナと呼ばれています。古代ペルーで知られており、それが今日まで使用され続けているととても重要なことです。この技術の使用を強調し使い続けている位置は現在カタカオス、サン・ジェロニモにあるツナンとアヤクチョです。

他の家庭用品と同様に、花や葉は提示されている。すべての花びらと葉は繊細に付けられています。ハンドルの上にある花でさえも。

